

## 序

「お先真っ暗」とか「一寸先は闇」などというが、これは先の見えない不安感を表している。もし先が全く見えなければ、手探り、足探りでも進むか立ちすくむ他はない。人が不安なく行動するには行く先の見通しが必要で少しでも先を見ようと努力することになる。ごく単純に人が高い所へ昇ったりするのは視界を広げるためであるし、望遠鏡の発明や、交信技術の発達は肉眼では見えぬ先まで見ようとする願望の表れと考えられよう。さらに進んで人が未だ見ぬ現象の予測に強い関心を持つのも、先を読むことによって確かな抛り所を得ようとするからに他ならない。別な見方をすれば、現象が必然的であることによって先を読むことができ、安心して進める知的抛り所を得る事ができるわけで、人類の進歩はある意味で必然性追求の過程であったということもできよう。人は必然を求め、必然の存在を信ずることによって文明を発達させてきたのである。

こうしてある現象が果たして必然か偶然かは人間の知的活動における大きな関心事であり折に触れて問題になる。ノーベル賞受賞者のジャック・モノー (Jacques Monod, 1910~) の『偶然と必然』を初めとして多くの人が論ずるところである。すなわち遺伝子情報の伝わり方から天気予報、交通事故の発生、株価の変動、政治体制の推移、国家間紛争、宇宙の誕生に至るまで、さまざまな現象の必然か偶然かが論議の対象である。

必然の追求は、安心を求める人間にとって必然と言える。例えば地震予知など災害対策に関わるものは、できるだけ早く必然的現象が正確にわかるのが好ましい。もっとも全ての現象が起こる前に予め読めてしまうというのは理想かも知れないが、味気ないことも多い。例えばある人間の一生が最初から身動きできない宿命によって決定されているとなると、いかにも辛い。しかし実際には現在の分子生物学では生命現象は偶然と考えられているように、自然現象も社会現象も極めて偶然に支配されることの方が多いのである。人間は安心を求めて限り無く必然を求めながら一方では何が起こるかかわからない偶然にも限り無い期待を持ちたいのである。人間の多くの知的活動が必然を求めて展開されてはいるが、研究とはそうした必然と偶然の狭間で、どこまで現象を必然の下に捉えることができるかという一つのささやかな試みに過ぎないと言ふべきであろう。

1991年4月

清水建設㈱技術研究所長

工学博士 太田利彦